

地域・子ども・大人の「関係をつなぐ」(3)

小川 清実

保育士の役割とは「関係をつなぐ」こと

小川 欲を言うと、「びっぴ」を通して親が育ってほしいと思っています。だから、本当はここに来てくれる親たちがみんな、地域の子育てリーダーになってくれて、どんどん地域がよくなっていくというのが夢なの

ね。それで、たまに『びっぴ』に来てくれて、情報交換したりするのがいいんだけども。

——そうすると、保育士さんの役割は何でしょうか。

小川 最初のころは、保育士さんたちと「何をしたらいのか」と何回も話し合いをしました。ここには、園長先生をやった人、普通の保育所で保育士をやっていた

人、療育センターでお手伝いをしていた人がいます。二人ずつローテーションを組みながらの運営ですけれども、ここでの役割について最初のころはとても疑問があったようです。

最初は役割をわからなかったみたいですが、だんだんと「普通の保育と同じだ」という結論が出てきた。やっぱり、「子どもと親をどう理解するか。ちゃんと見て理解する」ということに尽きるということです。普通の保育所も、子どもと親がいる。地域でも同じで、基本は同じだという発見が、保育士からありました。

——保育士の役割は、結局子どもを見て子どもを理解するだけではなくて、同時に親を理解し、親も育てていくということでしょうか。

小川 そうそう。今、政府からは、それが求められているのね。ところが、実際の保育所の保育士さんたちは忙しいでしょう。やっぱり、最初はそこが難しいみたい。「親を育てる」といっても、なかなかね。本当に必要な

人には手が届かないでしょう。（保育士との話し合いに）来てくれなかったりとかな。

——預けっぱなしということでしょうか。

小川 そう。こういう地域に『びっぴ』のようなものがあれば、親と丁寧に向き合うことができる。『びっぴ』には、保育士さんで、「今、産休中、育休中です」という人も来ている。そういう方が絵本とか紙芝居を読んでいると、「ああ、上手」と思いますね。今日はプロがいると。（本当は保育士だけでも、子どもたちにとっては）誰ちゃんのおばちゃんを読んでも、子どもたちにとっては、参加してくれる。上手にピアノを弾いている人もいます。

それに対して、『びっぴ』の保育士は、そういうことはやらないけれども、親子、子ども同士、親同士の関係を見て、必要と思ったときに入っていくわけ。今、『びっぴ』の保育士さんたちは、「関係をつなぐ」難しさばかり、おもしろさがわかってきていると思います

す。子どももどんどん変わり、親も変わってきているので、保育士さんたちも、やりがいがあると思っっているようです。

以前は、「保育士はいなくてもいいのではないか。単なる受付のおばさんなら、誰でもできるのではないか」と思われていたけれども、今はそうではない。「役割がある」ということがわかってきてくれている。それは、子育て支援の取り組みに携わるすべての保育士の役割ではないでしょうか。

実は、「関係をつなぐ」という役割は、普通のお母さんでもできるのよね。けれども、特に、以前保育園の先生をしていた、幼稚園の先生をしていた方だと、必ず子どもを集めて何かをやるの。子どもを集めて何かをやる、それを期待して親が来る。「子どもを集めて何かしない」と「保育していないよう」に、親が誤解しちゃうのね。ここはそうではない



い。『びっぴ』はそれはやらない。

保育学科の学生が子どもと直接出会う場

——ところで、大学という教育機関が子育て支援を行う意義は、どこにあるでしょうか。保育士を目指す方々が、子どもと触れ合い学ぶ機会を積極的に作るということです。新しい時代が求める保育者像とは一体どんなものでしょうか。

小川 ここでは学生たちが直接子どもと触れ合う、親子を知る機会になります。今の学生たちは、赤ちゃんを見ていない。でも、保育士とか幼稚園の先生になりたくて、そのイメージだけで入ってくるけれども、実際の子どもをほとんど知らない。中学校とか高校で、たった一日ぐらい保育園に行くでしょう。それぐらいで子どもを知った気になっていて、「かわいい」ぐらいで、自分は将来保育士になりたいなという希望だけはあるけれども、実際は知らない。

私が今までずっと短大などで教えていたから、「子どもの遊んでいるところに行って、観察をして記録する」というのを、宿題で出していたの。そうしたら、あるときから、その観察記録がとれませんということになったの。どうしてかという、その辺で子どもが遊んでいないという事態になったの。それは随分前です。十年か、もっと前かもしれない。

その前は、その辺に、わりと子どもが遊んでいたの。だから、うちの隣の神社でいっぱい子どもが遊んでいるから、そこで観察記録をとればいいという感じだったのが、あるときから、ぶつたりできなくなった。「子どもがいません」って学生に言われたの。子どもをどこに探しに行ったらいいか。例えば、デパートの玩具売り場に出向いていかないと、子どもがいなくなったのです。わざわざ知り合いの親戚の家を訪ねていくなどしないと、子どもの記録がとれなくなっちゃった。ということは、保育士や幼稚園の先生を目指す人たちが、本当に子どもを見ないでいるということを実感したのです。

ここの学生はいいですよ、親子をいつも見ているから。まだ直接的には、『ぴっぴ』の中では学生に関らせていないのね。というのは、学生は子どもと遊びたいの。親は遊んでほしいの。親も「学生さんはいつですか？」と待っているの。

けれども、ここは「親が学ぶ場」だから、それはさせたくないの、学生を『ぴっぴ』にそろそろ入れるように思うけれども、子どもと遊ぶのではない。絵本を読んだりするのではなくて、玩具の片づけをするといった役割をする人として入る。一緒に遊ぶ人ではない。

でも、親は遊んでほしいのね。ちょっと楽をしたい。それも大事で、ちょっと預けたいという気持ちもわかるけれども、「預けるところは、今、いっぱいあるでしょう。預けるときは、そちらへどうぞ。ここはそうでない場所ですよ」と、いうことです。

「保育の専門性」とは「生活力」

——子どもと直接触れ合う機会の少なかった学生さんた

ちに、まず身につけてほしいことは何でしょうか。

小川 私は、学生に「生活力」をつけたいわけ。そのためにはどうしたらいいかというと、「いつも言われたことだけをやっているのではなくて、自分たちで考えて、自分たちで生活できる」という人にしたいと思っています。

保育者は、例えば、何かをすばやくやらなきゃいけないということが、あるでしょう。それも段取りよくやれるように。さらに、感受性豊かな人に育ってほしい。

学生に対しては、昔に比べてレベルが下がったとか、いろんなことを言う人もいるわけ。家庭で育てられる部分が、今はこれだけ育てられていないでしょう。けれども、今までだったら家庭で育てられてきた部分を、学校で育てられるかというと、これはやっぱり限界があるから、いかに家庭と連携していかなきゃいけないかということです。入学式の後、親に話をする機会があるのですが、そこでは必ず、「お嬢さんたちが困らないように、ぜひお嬢さんたちに家事などをさせてください」と頼む

の。でも、やらせていないわね。

秋に文化祭があつて、そのときも親の会があるのね。そこで、「すみません、まだ何もさせてなくて」と言う親もいるの。何もさせていないというのは、要するに何も家事をしていないの。ご飯を炊いたこともない、洗濯もしたことがない、掃除もしたことがない人たちが保育学科に入ってきている。そういう学生たちが、幼稚園に実習に行つて、「クラスの掃除、頼むわよ」と先生に言われても、何を使い、どう掃除するのか皆目見当がつかないわけでしょう。わからなければ、聞けばいいのよね。「どれを使つて、どうしたらいいですか」と。ところが、今の学生の中には聞くこともできない人もいる。

そういう学生たちを「保育の専門性」をもった人に育てていく使命があるわけだから、そのときに、どういふふうに着ていくかということ、「基本的には生活できる力がある人」ですね。昔の人はみんなやっていたことだけれども……。 (笑) だから、「生活」がしっかりとできる人。「生活」ができる人というのは、「すべてバラ

スよく生活する」ということでしょう。そういう「生活」が基本的にはできている人、その上で、子どもの行動を見て、援助できる人ということを勉強していけば、保育の専門性って、そんなに特別のものがあるわけではないと思います。

——「生活力」に対して「学力」が今の日本にあるかというのと、「学力」もないでしょう。

小川「学力がない」のは、「生活力がない」からでしょう。「生活力がない」と、「基本的に学ばなければいけないことが入らない」のよ。何か簡単なものでもいいけれども、それをやらなければ、この「生活」は成り立たないというもの、自分がこれをしなればというものを、みんな一つずつぐらいいはもってやるのが、まず大事だと思いますが……。

今だからこそ、保育者に求められていることがいっぱいあるけれども、「保育の専門性」とは一体何なのか。昔みたいに、子どもを親にかわって世話をすることだけ

ではないことは確かだけれども、昔も大事にされていた、今も大事にされていることって何だろうと考えたときに、「きつちりと、その人間が人間らしく生きていくるように育てる」ことに尽きるわけでしょう。そのためには、保育者自身も、まず「自分の生活」を、立派じゃなくていいから普通にやっていけるような「生活力」をもつことじゃないでしょうか。

失われた「生活」

——今の若いお母さんたちというのは、子どもを産んで、初めて「生活」というものに向き合うことになると思います……。

小川 だけど、やっていないから、困っちゃったり、外注しちゃったり、外注が悪いわけではないけれども……。

最近思うのですが、もともと子育てのときだけは、うんと時間がかかるでしょう。普通の時間であれば、たっ

た二年とか三年、三歳で幼稚園へ行けば三年のことだけれども、三年間の、家での一日一日つて、起きてから寝るまで、すぐたつぷりあるわけでしょう。その時間は徹底的に子どもに合わせて過ごす時間になる。その時間の歩み方というのは、大人たちの何時、一日、一時間、六十分という歩みと違うでしょう、同じ六十分でも。大人の時間は、「いかに短時間で効率よくするか」ということをずっと求められてきている。けれども、子どもが小さいうちは、絶対にそうじゃないでしょう。そのあたりのギャップを理解することができない。

——結局、時間認識が合理性と効率を優先する大人の時間へと一回切りかわってしまったものを、そうでない方向には簡単に戻せない。それから、子どもに徹底的に合わせていく生活に適應していく自分自身を待てない、ものすごい焦りがあると思うのです。

小川 そうそう。そこでい



らつく。そこで虐待が起つたり、子どもがやることを待つてあげられない親というのが本当にいっぱい出てくる。私もそうだと思うけれども、効率よく、早くというふうにして育てられちゃったものね。

ひと昔前は、家事もすごく効率が悪かったのよ。それこそ洗濯機がないので手で洗濯していた。それから、今はあまりないと思うけれども、布団の打ち直しというのを家でやったの。布団の打ち直して、すごく時間がかかるのよ。まず、布団側といって、直接綿を包んでいる布を洗う。今みたいに洗濯機ではできない。手で洗って、のりで洗い張りというのをしたの。この間、五十代の人と、そういうのをやったわよねって話をしたの。洗い張り用の長い板がどこの家にもあったわけ。板もせいぜい一枚か二枚でしょう。そうすると、毎日毎日一枚の側を洗濯するのにも時間がかかるわけでしょう。お日様がある日だけのりづけして。それから、布団側をもう一回縫って、ミシンじゃないのよ、縫って、袋を作る。だ

から、一枚の布団を打ち直しするのは大作業なの。一枚の布団で二週間どころか一か月近くかかるわけ。子どもは結構役割があるのよね。

最終的なところで、布団側をくるむときに、「押さえる」というのが子どもの役割。押さえておいてくれないと困るところがあるの。端っこを「びっと」押さえるというのがあったの。五十歳代以上はそういう体験があって、「やった、やった」と話したの。

そういうふうにして、一枚の布団を打ち直しするのも、それだけ時間がかかっていた。子どもはちよろちよる遊びながらも、その子どもの時間と大人の家事の時間は、ゆったり流れるという意味で、結構重なっていたと思うの。

火も全部外で起こして、外で煮炊きするという時代もあったでしょう。今は全部それが電化されて、すごく簡単になって、家でご飯をつくらない親もたくさんいるの、外食で済んじゃうから。あまりにもいろいろなもの

ができていますでしょう。そうすると、効率がいいわけ。お金さえあれば欲しいものが手に入る。そういう生活を大人はしている。ところが、子どもが生まれてから二、三年は、完全にそうじゃない時間というのが必要で、そのところのギャップをどう埋めるか、本当に大問題ですね。

子どもが育つていく時間に向き合う

小川 今の世の中で、子育てをするというのは、大変なことなのねと、だんだん思っています。子育てをしている時間は、わずか二、三年だけれども。ゆったりと子どもが育つていく時間というのは、もしかしたら三年もなくて、二年ぐらいで済むことなのよ。そこだけ頑張れば、あとは大丈夫だと思うのね。そう大変でないと思うの。

人間的なやり取り、関り、相手の気持ちがわかるなんていうのは、小さいときの基本でしょう。それがなく

て、大きくなったからわかつてよといっても無理だけれども、そこで親子がわかり合える関係になつていれば、大きくなつてから、あまりひどいことにはならないのじゃないかと思つているけどね。だから、子どもが小さいときの関りは、省エネしてはいけないの。

——『ぴっぴ』の目指す子育て支援とは、支援という形でサービス過剰にならない、子育てを外注させない、不合理的で非効率なことにあえて向き合わせることで、親子で「生活力」をもう一度つけ直していくということでしょうか。

小川『ぴっぴ』で、本当に「ゆつたり」と過ごしていく親子もいるのね。ゆつたりと過ごして、「ああ、こういう時間があつていいな」という実感があると、子育てが変わる。「こんなふうに子どもと関ることが、家では難しいですよ」とお母さん方は言います。そうだと思う。家では、「さつさ」と何かをやりたいわけでしょう。だからこそ、今、家じゃなくて、こういう場所が必要

だと思う。家でやるのは難しいのね。

—— 本当は、子育て真つ最中の親子だけではなくて、日本人みんなに必要な場所かもしれないですね。余裕のない慌しい日常に追われているわけだから。

小川 本当にそう思う。だから、確かにまだまだいろいろな課題はあるけれども、『ぴっぴ』にいるだけで、私自身とても癒されます。『ぴっぴ』では、子どもが、「こは僕たち、私たちが守られている場所」というのがわかるから、ものすごく笑顔が出るの。にこにこしている。子どもが誰にでもにこにこしてくれるの。にこにこされれば、やつぱりににこにこするでしょう。それでほんとできるというか、そういう場所にはなっているわね。

(東横学園女子短期大学)

聞き手 首藤 美香子

☆この連載は今回で終わります。